

【ねがいはましては】

令和元年10月25日

KYOWA SCHOOL

第348号

「兆」

8月下旬の新聞に、お笑いコンビTIMのゴルゴ松本さんの記事が載っていました。というより松本さんに関してのことではなく、松本さんがやっておられる「命の授業」からの一部抜粋と言った方がいいのかもしれませんが。

その日の新聞には、初面より文科省が学校を介さずに不登校についての調査を行うといった見出し……。ゴルゴさんの記事も35面の3分の2がいじめなどの内容の中に載っていました。その日は20日、全国の学校では、地域によっては翌日から新学期が少なくないようです。なるほどという気がいたしました。

で、「兆」です。「し」をつけて「兆し」（きざし）、調べてみると、古代中国において、占いに亀甲を焼いて裂けるときの形を表したのだそうです。つまり占いによって答えが出る前の「きざし」というわけです。なるほど……。また、中国では、数が多いことを単純に表すのだそうです。だから「兆」。

さて、ゴルゴさんのおっしゃっている「兆」……。学校でいじめに巻き込まれ始めたとき、その「兆し」の中にいます。そんな時は、今の自分の状態を、目偏を加えて「眺」めてみようといひかけます。そして、つらいな、嫌だな、死にたいなど、そこまで追い込まれていると感じたときには、「逃」げていいのだそうです。逃げるという行為は、生きているからこそできる行為、自分を守るためには学校だてに行かなくていい。一旦逃げて落ち着いてきたら、今度は自分が成長できるように「挑」んでいけばいい……。

兆に目がついて「眺」める。兆にしんによろがついて「逃」げる。兆にてへんがついて「挑」む。漢字ってすごい。続きます。いじめに遭ったときには、本当は自分の意思や思いを言葉にして伝えられるといい。「意」という漢字は「音」の下に「心」がつかます。自分にしか分からない心の音を見せよう。ご両親や先生に気づいてもらえるように、手紙やメールで文字にしてみる。それができないときには涙を流す。涙をながしていたら、きっと、誰かが気づいてくれるときがくるから……。

松本さんは、少年院などへ慰問にいっているそうです。ユーチューブなどでも視聴できるようです。本も出されているそうです。「あつ、命の授業」廣済堂出版など……。

学校には、少なからず「いじめ」の恐怖に日々おびえながら通っている子たちがいます。皆が「仲間」、助け合おうといった意識でいられるクラスは数少ないと思います。子どもたちに起こる、誰もが感じてしまう矛盾がそこにひそんでいます。中学校へ行くと、それは顕著なものになります。定期テストで現れる「順位」です。男の子は競うのが好きな生き物であり、(生き物とは語弊があるかもしれませんが)何でも勝ち負けに繋がります。人の歴史でもその兆候は見られます。それが「戦争」です。人と人の殺し合い……。生きるか死ぬか……。それに理性を重ね合わせたものが「スポーツ」などになるのでしょうか。少し極端だと思いますが、いずれにしても戦争でも「勝つか負けるか」、スポーツでも「勝つか負けるか」。テストでも「勝つか負けるか」……。(本来の学びはそうではないはず)

その中に子どもたちは強制的に放り込まれます。「勉強の世界は競争なのだよ……。」と。「あれっ。そうなんだ。小学校のときは、けっこう班発表であったり、みんなで観察や実験、一緒に作品作りなど、結構『和』の大切さが多かったような気がしていたのに……。」

いじめの心理……。子どもたちの中では結構単純な行動となって表れます。いじめに遭わないように常に自分を優位な立場に置く。いじめに遭う子は「ひとり」の場合に起こりやすい。だから常に「仲間」を作っておく。仲間を作るには、共有する部分を多く持つ。それには、ある個人の欠点を探り、その部分を批判することで共有がふえる。仲間獲得。

とくに女子の中に起こりやすい「いじめ」は、今掲げたようなケースが目立つようです。だからグループができやすい。また、「恥」についても、女子の場合はとくに敏感な反応をしてしまうことが多いかもしれません。あの子が私に恥をかかせた。だから、許さない……。怖いですね。

男の子の場合はかなり単純です。中学1年生になったばかりですと、強いかわ弱いかわ、それだけということが多いようです。だからかなり背伸びをしたり、虚勢を張ったり……。被害に遭いたくない場合は、そっと目立たぬように静かにしてみたり、さもなければ、残るは「成績」です。いじめ解消法のトップは「頭がいい」です。頭が良ければいじめに遭いにくい。これも誰もが言葉を交わさなくても暗黙の領海です。だから勉強する……。そう思いながら机に向かうお子さんはいない、とは言い切れません。

そのように、大人の世界では「えっ」と思ってしまうことでも、子どもたちにとっては、切実な、大きな悩みになっているケースが少なくありません。競うことよりも、もっと崇高で尊いもの、思いやり・優しさを、まず、子どもたちの土台にしてあげること。その上で、世の中って、ついつい人を傷つけてしまうものが数多くあること。でも、大人たちもそうだけれども、そのようなものに負けないように、日々戦っているのだと伝えてあげなければならぬと思います。勝ち負けは2番目、その前に、今、目の前にいるあなたに出会えたこと。その奇跡に感謝しましょう。そして、勝敗がついたあとには、相手に「ありがとう」の気持ちをこころから伝えましょう。人としての兆しを常に……。